様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０９４３

研究課題名（和文）台湾漢人の民間信仰から見る「記憶」と歴史の「馴致」に関する宗教人類学的研究

研究課題名（英文）"Memory" and "Taming" of History: from the Perspective of Anthropology on Taiwanese Folk Religion

研究代表者
三尾　裕子（MIO, Yuko）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：２０１９５１９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、台湾の漢民族社会の民間信仰を事例に、異民族と接触し、あるいは支配された社会的な記憶がいかに生成、伝承、変形されていくのかを、具体的な信仰対象の出現とそれに対する人々の対処、信仰体系や儀礼体系への取り込みといった側面から考察した。台湾は、繰り返し外来政権の統治を受けたが、外来者を信仰対象として組み入れるという事例が少なくない。特に、本研究では、日本人を神に祀るケースを中心として、補足的にオランダ人や中華民国人（蒋介石）を祀る場合も考察した。日本人に関しては研究期間内に40以上の事例を発見し、うちいくつかについては、比較的詳細な聞き取り調査、儀礼への参与観察を行った。

研究成果の概要（英文）：Taiwan was repeatedly governed by rulers who came from outside the island. And it's interesting to note that there are not a few examples of incorporating those rulers as objects of faith. This research aimed to clarify how social memories are created, passed down and transformed by contacting with foreigners or being dominated by them through folk religion. In particular, in this research, we mainly studied cases where Japanese were enshrined to God. In addition, we considered cases of deifying Dutch and mainland Chinese (Chiang Kai-shek) concomitantly.With regard to Japanese, over 40 cases were discovered within the research period. We conducted a relatively detailed interview survey and participant observation to a few temples in which Japanese are enshrined.

研究分野：人文学

キーワード：宗教人類学　記憶　歴史　台湾　馴致　民間信仰　植民地

１．研究開始当初の背景

民間信仰（民俗的な信仰）に普遍的に見られるアニミズムは、宗教人類学においては古典的な研究対象であるが、決して時代遅れの研究対象になってしまったわけではなく、最近では、たとえば、グローバル化や宗教の世俗化の中における伝統的な信仰体系の維持、変容、再活性化に関する研究や、医療人類学の文脈で、西洋医学とは異なる在来知としてシャーマニスティックな治療師に注目した研究などがなされている。また、E. Tylor のアニミズム観のような人間が能動的主体となって霊魂を認知する西洋的なモデルをさけ、人間を自然や環境と地続きの存在としてとらえ、霊魂の働きかけを受け取るものとしてとらえようとする議論（岩田慶治 2005『木が人になり、人が木になる』人文書院）などが注目を浴びるようになってきている。

一方、研究代表者が調査研究を行ってきた漢人の霊的存在への信仰に関しては、1970～90 年代に、台湾を舞台に、主に欧米研究者の主導で豊富な研究がなされてきた。それらの研究では、霊的な存在に関する人々の観念や実際の祭祀活動の詳細を考察することで、霊的存在が「神（gods）」「鬼（ghosts）」「祖先（ancestors）」の 3 種に大きく区分しうること、また霊魂がこれらの範疇の境界をまたいで変容する動態性について、研究がおこなわれてきた。また、台湾漢人の宗教についての記念碑的な著作において、Steven Sangren（2000 Chinese Sociologics, Athlone Press）は、マルクスの「疎外」概念を宗教信仰に応用しつつ、個々の人々の信仰実践が、如何にそれぞれの意思を離れてシステムを再生産しているかを、様々な儀礼や霊魂の「霊（power）」といった概念を考察しつつあきらかにした。

これらの漢民族の民間信仰研究では、人々によって既に霊的な存在として認知されたものの霊力やそれらのカテゴリーの再生産、強化、変容についてはそのメカニズムを明かにしているものの、新たにいかなるもの（人間であれ非人間であれ）が霊的な存在として出現し、人々の宗教実践の中に取り込まれていくのかについては必ずしも明らかにはしてこなかった。特に、漢民族の古典的な宗教概念においては、「神」は異民族の捧げる供物は受け取らず、また民も異民族の「神」は祀らない、とされてきたが(『春秋左氏伝』禧公十年等)、実際には、様々な異民族の霊的な存在が信仰に取り込まれている（例えば、東南アジアでは「拿督公」や徳教など）。すなわち、宗教実践という観点からみれば、漢民族のそれは、包容力、多元性にこそ特徴があると言える。

こうした漢民族の民間信仰の包容力、多元性については、台湾においては、オランダ、清朝、日本、中華民国といった「外来」の政権によって統治された経験、漢民族の大陸から台湾への移入による先住民との接触の経験によって、異民族あるいは異民族に関わるモノが信仰対象とされている点に見て取ることができる。このことから、人々は、自らを他と峻別して霊的存在となりうるものを選別しているのではなく、むしろ、地続きの霊魂の世界から霊的存在によって人々が呼び掛けられていると考えるほうが妥当であると思われる。しかし、こうした信仰対象については、これまで、地方誌などにおいて、断片的な報告があるにすぎない。また、研究論文などに関しても、台湾の大学の修士論文レベルで「日本神」「蕃神」等の名称で、いくつかの寺廟が紹介されている程度である（たとえば、尾原仁美 2006、董詠祥 2012 など）。これらの中では、有名なものとしては、日本植民地期に農民への重税を強いることを偲びなく思って身を挺して農民たちを守ったといわれる日本人警察官が「神」となって祀られた「義愛公」（義県東石郷）や、日本人兵士で、台南上空でのアメリカとの戦闘機による戦いで銃撃され、撃墜時に集落への落下による大火災が起きないように操縦したことから、死後その霊が顕現し神格化したと言われる「飛虎将軍」などが紹介されている。オランダ人由来の「神」、日本の軍艦、最近では蒋介石が神格化して祀られている廟なども、地方誌や新聞、ウエッブサイトなどに紹介されている。研究代表者の予備調査でも、戦死した日本の兵士の卒塔婆を拾った後、霊験を著して「神」となって廟に祀られたケースや、また偶像化される場合だけではなく、神像をもたない形の日本人の「囝仔神（子供が霊的存在となったもの）」がシャーマンに憑依して現れるなど、他者との戦いや接触の歴史と関わって神格化されたものは、詳細に現地調査を行えば、類似する事例が相当数ありうることが予想される。

こうした事例は、上記の gods, ghosts, ancestors の区分においては、ghosts あるいは、霊験があらたかな（現世利益を与えてくれる、あるいは最悪の災害から人々をまもってくれるなど）ghosts が gods に転換しつつあるもの、ととらえることができる。その点では、これらの霊魂は、台湾の民間信仰の伝統的なスキームに則った形で取り込まれている。しかし、台湾漢人にとって、征服者、植民者などの権力者やそれらに由来するモノが神格化される契機については、そのメカニズムは明らかにされていない。そこで、本研究では、異民族との遭遇による紛争／戦争や、異民族による征服といった、彼ら自身がコントロール不能な暴力的な経験を信仰対象の形で取り込んで具象化、霊的存在化し、身体化された儀礼行為によって、漢人の文化体系の中に埋め込んで「馴致」していくことで、人々の間で分有される「記憶」としてきたという仮説（cf. コナトン 2011『社会はいかに記憶するか』新曜社）に立って考察を行うことを着想するにいたった。

２．研究の目的

本研究は、人間の生が往々にして紛争/戦争や異民族支配、災害（自然災害や人災）等の「暴力」から免れることができないことを出発点として、人々が、そうした経験をいかに「馴致」（自らの生の営みを肯定しうるように経験の総体を再構成すること）していくのかを解き明かすことを目的とする。具体的には、台湾の漢民族社会の民間信仰を事例に、異民族と接触し、あるいは支配された社会的な記憶がいかに生成、伝承、変形されていくのかを、具体的な信仰対象の出現とそれに対する人々の対処、信仰体系や儀礼体系への取り込みといった側面から考察する。「記憶」や「歴史認識」研究では、オーラルヒストリーの収集や文字資料の分析が中心になりがちであるが、本研究では、民間信仰儀礼といった身体化された行為の遂行性により重点を置いて考察する。

本研究では、日本植民地化以前に台湾に定住した漢民族の子孫を主対象に、以下を解明する。

（１） 異民族や異民族との接触、権力関係に由来するモノなどが霊的な存在として顕在化し、信仰され、場合によっては偶像化され寺廟において祭祀されるようになった事例に関し、網羅的に現地調査（信仰対象や寺廟の由来、具体的な霊験の事例、儀礼の概要などについての聞き取り調査）を行い、台湾におけるこのような範疇に入りうる信仰対象の全貌を把握する。

（２） 上記の信仰対象のうちから、gods となった霊的存在、ghosts にとどまり続けている霊的存在それぞれいくつか取り上げ、定期的に行われる祭祀儀礼や、シャーマンに憑依した霊的存在が信者の病気治療や様々な悩みごとの解決を行うセアンスを参与観察することで、異民族との接触、権力関係などが、いかに言語化され、また身体化され、人々によって共有される「記憶」となり、暴力的な歴史が「馴致」されていくのかを考察する。

３．研究の方法

（１）台湾で外来者が「神」として祀られている事例の全体像を把握するため、日本人の事例を中心に、オランダ人や蒋介石などの事例を含め、ジェネラル・サーベイを行った。

（２）ジェネラル・サーベイによって資料を収集すると同時に、それらの中で、人々の「記憶」と歴史認識の形成に結びつく事例としてより深い調査ができ、「厚い記述」が可能な事例をいくつか選び出し、関係者への複数回にわたるインタビューや、儀礼への参与観察を行った。

（３）調査にあたっては、文献調査に加えて地元の文化を研究している郷土史家なども訪問し、信仰に関係する歴史的な事実関係などの理解に努めた。

４．研究成果

（１）日本人を「神」として祀る事例は、インターネットが発達した今日、ネット上に個別の寺廟への訪問記などが掲載されていることはあるが、これまで先行研究がほとんどないといってよい。その中で貴重なのが、尾原仁美による修士論文（2007 『台湾民間信仰における日本人神明の祭祀とその意義』国立政治大学民族学科修士論文）であるが、その中では、11 種の「神」、21 か所の廟宇が紹介されている。しかし、本研究ではネット上の情報や口コミなどを通して、29 種、41 か所の寺廟をリストアップし、その多くについて、訪問調査を行った。ただし、管理人等が常駐していない寺廟、小祠などもあったため、採集できたデータの量や質にはばらつきがある。また、個人の住宅の中で奉祀されている事例もいくつか見られた。こうした場合には、なかなか外部に情報がもたらされることがないため、事例数が実際にはもっと多数である可能性は十分にある。

（２）上記のように日本人の事例が芋づる式に増加したため、オランダ人や大陸中国人など非日本人の事例については、十分な調査は行えなかった。オランダ人については３か所（うち１か所は、オランダ人ではなく平地原住民である可能性もある）、蒋介石については３例のみ（うち１例は、かつては祀っていたが訪問時にはもう祀っていないということであった）調査が行われた。

（３）日本人の事例についてのジェネラル・サーベイに関して明らかになったことは以下の通りである。

①警察官、女性という事例もあるが、殆どが軍人、兵士が死後「神」になったと伝承されている。

②それらの霊魂は、第２次世界大戦において戦死した日本軍兵士を慰霊するために顕霊したと述べられる場合が多々見られる。

③寺廟の所在地は、台南市、嘉義県市を中心に、高雄市、屏東県などの台湾西部に集中的に分布しており、その他の地域は数が少ない。

④当初は、人や家畜に災いをもたらすという形で顕在化し、夢見や託宣などにより「神」として祀ることを要求するケースが多い。

⑤「神」になる過程で、台湾漢人の霊的な存在のヒエラルキーにおいて高位とみなされている「神」のもとでの修行を行っていると伝えられているケースが多い。

⑥供物や神輿の巡行などにおいて、日本に由来するモノ（供物、神輿）などが使われる場合が見られる。

⑦日本人を「神」として寺廟に奉祀する形態は、台湾の政治の民主化が始まった 1980 年代後半以降に事例が増えている。

⑧日本人を祀る寺廟や、慰霊のために建てられた寺、日本人の位牌が安置されている寺な

どを回る日本人の団体が散見されるようになり、そういった日本人と現地の台湾人との間での交流が見られるようになっている。

（４）本研究では、植民地化や戦争といった、被支配者にはコントロールすることができない暴力的な経験がどのように人々の間で分有される「記憶」となり、信仰対象を生み出し、意味づけられ、儀礼行為によって漢人の文化体系の中に埋め込まれて飼いならされていくのかを明らかにすることを目的とした。このため、ジェネラル・サーベイで発見された諸事例から２つの事例（霊聖堂と東龍宮）を抽出し、よりインテンシブな調査を行った。どちらも 1980 年代以降に寺廟が建てられている。前者は祟りという形で人々の前に姿を現しているが、他方は霊魂が初めから「神」の依り代としたい人間を指定して顕霊している。また、前者においては、日本統治時代に、地域における日本時代の土地利用の在り方が、現地の人々にとって二重の意味で忌避される性格を持っていたが、日本人の軍人、軍医などと名乗る霊魂の出現後、人々のコスモロジーに依拠した宗教的な処理がなされることで浄化され、コントロール可能な場所となっていく過程として捉えられた。後者については、国家の視点に立つ歴史においては植民者、暴力的支配者として位置づけられた人物たちが、信仰する当事者たちによって意味を読み替えられていく過程が見られた。こうした地域の中での人々の記憶の在り方は、国家の歴史とは異なる民衆史の構築という点から読み解くことができることが明らかになった。こうした成果については、投稿論文や国内外の学会において発表した。

（５）しかしながら、本研究にはいまだ課題も残されている。

①事例数が予想外に増加したため、ジェネラル・サーベイに時間がかかり、インテンシブな調査ができた事例が限られている。今後も、２つの方法による調査を継続していく必要がある。

②上記とも関連するが、身体化された儀礼への注目という点では、儀礼への参与観察はいまだ不十分である。特に、道教儀礼がかかわる部分が台湾の伝統的な「神」に対して行う儀礼とどのような点で共通性があるのか、あるいは相違があるのかについては、今後の課題である。

③日本人を「神」とする事例を、オランダ人や蒋介石などの事例と比較することについては、今後更に調査を行っていく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

① 三尾裕子、「植民地経験、戦争経験を「飼いならす」―日本人を神に祀る信仰を事例に―」、『日本台湾学会報』、査読有、19、2017、14-28。

② 林美容・三尾裕子・劉智豪、「田中綱常から田中将軍への人神変質―〈族群泯滅〉の民衆史学―」、『日本台湾学会報』、査読有、19、2017、50-62。

③ 林美容、「從田中綱常到田中將軍的人神蛻變：無關族群的民衆史學」、『台湾文献』、査読有、68(4)、2017、147-179。

④ 三尾裕子、「《特集》外来権力の重層化と歴史認識－台湾と旧南洋群島の人類学的比較　序」、『文化人類学』、査読有、81(2)、2016、217-227。

〔学会発表〕（計　６件）

① 三尾裕子、「將殖民地經驗與戰爭經驗「馴化」：一個祭祀日本人為神的信仰事例」、The 2nd International Conference on Religions of the Chinese, 2017 年。

② 林美容、「從田中綱常到田中將軍的人神蛻變：族群泯滅的民衆史學」、The 2nd International Conference on Religions of the Chinese, 2017 年。

③ 三尾裕子、「植民地経験、敗戦経験を『飼いならす』－台湾・東港の民間信仰を事例に」、日本台湾学会第 18 回学術大会、2016 年。

④ 林美容・三尾裕子・劉智豪、「田中綱常から田中将軍への人神変質―〈族群泯滅〉の民衆史学―」、日本台湾学会第 18 回学術大会、2016 年。

⑤ 三尾裕子、「日本在当前台湾所表示的意義内容的転移―人類学的観点」、中央研究院民族学研究所６０周年所慶「跨．文化」研討会　“Crossing Cultures” roundtable Ⅰ(from Taiwan)、2015 年。

⑥ 三尾裕子、「現代台湾における「日本」の意味の変容について―人類学的視点から」、第 7 回台湾ローマ字国際会議、2015 年。

〔図書〕（計　１件）

① 三尾裕子・遠藤央・植野弘子共編著、『帝国日本の記憶　台湾・旧南陽群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、慶應義塾大学出版会、2016、291 (1-30)。

６．研究組織

(1)研究代表者

三尾 裕子（MIO, Yuko）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：２０１９５１９２

(4)研究協力者

林 美容（LIN, Meirong）

慈済大学・宗教與人文研究所・教授